再び入院

11 月 20 日午後、名古屋市立大学病院に入院した。2013 年 8 月から 2 年 3 ヶ月後、再び目の手術のための入院である。

10 月中旬あたりから、右目が見えにくくなり、本を読んだり、パソコンに向かうのも難儀になった。信号もぼやけてしまい、危険すら感じるようになった。レポートを書くのも困難になり、11 月 11 日で「中断」することにした。昨年 7 月末から毎朝書き続けてきたので、残念でならなかった。「アベ政治」をはじめとして、書きたいこと、書かねばならないことが山ほどあったが諦めた。退院後、こうしてレポートを書いていると、なんだか元気が出てくる。

定期的な診察予約日は 11 月 30 日だったが、予約を早めてもらい、11 月 9 日に受診した。緊張しながら診察をうけたが、小椋教授から、すぐに入院・手術を「宣告」された。前回はそんなに急ぐ必要はないようだったが、今回はできるだけ早期の手術を求められた。小椋教授の予定などから、最速の 11 月 20 日の入院、手術となった。法事やシンポジウム、「高年大学」の講義、依頼原稿などがあり、迷うところもあったが覚悟を決めた。その後、急いで原稿を書き上げ、シンポジウムや講義準備をなんとか終えて病院に向かった。

病名は「黄斑円孔」である。網膜の中心部の黄斑部に穴(円孔)があき、視力低下、歪視、中心に見えない部分や暗点ができたりする。この間の「症状」のとおりだ。手術しか方法がないようで、硝子体を切除し、「空気」または「ガス」を注入して、うつぶせ姿勢をとることで、円孔の閉鎖が期待できるという。

連休後の 24 日午後、手術は無事に終わった。前回と同様、小椋教授の手術は素早い。緊張の連続であり、あまり覚えていないが、手術時間は 30 分弱だったと思う。手術が終わって、教授が「エアー」と言ったのを覚えている。「エアー」とは空気のことで、切除した硝子体に注入する。これが「ガス」だと回復がかなり遅れる。入院期間も長くなるので、「ガス」は避けたかったので、ほっとしたものだ。つい「えあー」と叫びたくなった。

病室に帰り、写真のようなベットでうつ伏せになって寝ることになる。ベッドの下に穴があいており、特製まくらの間に顔を入れ、ひたすらうつ伏せ寝で安静にしていた。腰痛に悩まされる身であるが、腰よりも首と肩が痛くなる。6 日ほどうつ伏せ寝とうつ向き姿勢が続く。

(2015 年 12 月 4 日)